〈授業レポート〉

小学校社会科における「身近な地域」学習の授業展開

―肢体不自由児を対象とした授業実践―

内　川　　健*

1.　はじめに

近年，わが国においては，特殊教育から特別支援教育に向けた取り組みがなされている。特殊教育が，養護学校などの特殊教育学校や特殊学級に在籍する障害のある児童生徒[1]に「特別な場」で障害の種類，程度に応じて行われる教育であるのに対して，後者はＬＤ，ＡＤＨＤ，高機能自閉症を含めて，通常学級に在籍している障害のある子どもに対して，生活や学習上の困難の改善又は克服に向けて個々のニーズに応じた教育活動の展開が期待されていくものである。特別支援教育が展開されていくに当たって，教科における社会科においても，今後は学習に特別なニーズを要する児童生徒の学習支援・学習方略が議論されていく必要があるといえよう。

本稿では，上述した学習障害のある児童の中でも，肢体不自由児に焦点を当てた，小学校３年生における社会科の「身近な地域」を単元とした実践報告を扱う。授業の単元においては，目標と内容を４次に分け，学校のまわりの公共施設や大通りなどを目的地としてコースを選定してから，実際に野外観察を通して，各コースがもつ地域的特色について調べることにした。そして，野外観察から調べたことを大きな地図に表し，その地図から読みとれることについて検討していくことにした（表１）。

2.　児童の実態と課題

授業実践を行った筆者の勤務学校は，肢体不自由養護学校である。学校は本校と施設併設学級に分かれており，実践は後者で行われたものである。施設併設学級に在籍する子どもは，本学に隣接する肢体不自由児施設「整肢療護園」に手術や訓練を目的として短期入院しており，入院が終わると前籍校に戻るケースが多いという特色がある。そのため，出身地がそれぞれ非常に広範囲となっていて，児童は学校の周りの地域についての空間認識は皆無であり，学習を進めるには難しさがあった。

また，肢体不自由児における授業を展開していく上では，障害の程度はあるものの，いくつかの学習上の課題を有し，それに応じた支援が必要となっている。肢体不自由児の多くは，日常生活動作や移動面において全介助あるいは一部介助が必要であるという状態である。加えて，脳性まひの影響を受ける児童生徒も多数で，認知の処理過程に障害のあることが多く，認知能力の個々の特性に応じた指導が必要不可欠とされる。また，学習レディネスが十分獲得されないまま就学を迎えてしまった児童生徒も多く，学習場面においてさまざまな支障がでる場合もある[2]。

一方で，単元の学習を進めて行くにあっての児童の実態としては，車椅子での生活ではあるが身辺自立できており，書字や移動も単独で行えるために，学習を行っていく上で身体上の支障は大きくなかった。しかし，日常生活の移動の大半は保護者に車で送迎してもらっているという現状があった。故に，自分たちが住んでいる地域の中を見て歩いたり，探索したりするという経験不足になりがちであり，その影響から居住地に関しての空間認知が乏しいという状況も見られた[3]。

＊筑波大学附属桐が丘養護学校

3. 単元及び授業における授業展開

単元を通じて得られた成果としては，児童は当該地域に対する既存の空間認識がなかったものの，野外観察によって得られた情報と，観察時に撮った写真などを活用することで，地図にルートマップを描くことができていった。また，地域の指標となるランドマークを見つけることで，子ども達の意識が学校周辺にある住宅や工場，商店などの建築物に向き，とりわけマンションやアパート，一戸建てといった住宅の高さに意識してくようになった。その結果，児童の空間認識がサーベイマップへと近づき，発砲スチロールを使って地域の地形や建物に高低をつけた，簡単な鳥瞰図で地域を表現していくことができた。児童が地図をまとめた段階では，「駅前にお店がたくさんある」，「商店の場所はかたまっている」，「学校のそばに大きな道路がある」「駅の近くには背の高いマンションがたくさんある」など，具体的思考での発言が多かった。つまり，地図上からの表面的な理解はできるものの，地域の動的な要素や特色に結びつきや関連性をつけた考えは出てこなかった。児童が今まで，そうした景観現象を見たり考えたりしてこなかったことが，その要因の一つであると考えられた。

また，居住地が広範囲に点在する児童にとっては，本単元で取り扱っている地域は，本当の意味での身近な地域とは言い切れない。地図作りを行うことが目的化されるのではなく，地図から地域の特色や構造を見ていくことが学習上必要となった。そこで，児童が地図上にまとめた情報だけではなく，地域における人の流れを時間軸で見ていく活動を展開し，より多面的な見方を育んでいけるようにしていった。そのための学習手段として，野外観察で出掛けた地域で観察時に撮影した写真と同じ地点における，朝の通勤時間帯と夕方の時間帯の連続写真を活用した。実際に使用した写真の地点としては，駅前や駅につながる道路，並び立つ商店街などの景観と，そこで動く人の流れが映し出されたものである。

児童はまず，朝と夕方の写真を見ていくことで，地域の姿は時間帯によって変わっていることに気が付いた。「朝や夕方にコンビニを利用する人が多い。だからコンビニがたくさんある」とか，「駅前にお店がたくさんあるのは，たくさんの人が駅を利用しているから，行きや帰りに寄れる」，「人の行き来が多いところの方にお店がある」という発言が出てきた。つまり，商店は人が集まる場所に立地することで集客力を保てることや，地域に住む人にとっても駅から自宅へ往復する際には，商店があることは便利なものとなっていることなど，この場所に住む人の流れと地域を結びつけて考えていくことができたのである。

次に，写真を見比べていくことで出された意見としては，「朝は駅の方に歩いていく人が多いけど，夕方になると反対方向に向かう人が多い」，「人がたくさん住めるし駅に近いから人気があるのでは」，「駅前にマンションや団地があるのは通勤や通学に便利だからだ」，「小竹向原の駅は都内に出やすい」といった発言が出てきた。マンションやアパートが駅前にたくさん存在する理由について考えていくことができたとともに，人の流れに着目することで一般的な立地の諸条件について考察していく芽生えがみられた。

また，調べたことを関連づけながら，自分たちが居住する地域について考えていく活動も行った。自分たちの住む街にも駅近くに商店がたくさんあるとか，駅前の方が高層マンションは多い，などといった地域社会のもつ一般性についての考えを持って，自分たちの住む地域の姿を概観することができた。一つの地域を学ぶことによって，地域的な諸条件を踏まえた上で，他地域について考察していくことができたのである。

児童は障害の特性上，地域に暮らす人々の様子を日常生活において，限られた時間の中でしか見ることができない。前述したように，車で

の移動が多いこともあり，通学路やその他の道路から見える土地利用の様子についての理解も乏しかった。しかし，本報告で行ったように人に着目して考察を行っていくことで，児童は自分以外の他者に目を向けるように，地域に住む人々の動きからより多面的に地域の特色について考えていくことができたといえよう。

5. まとめ

本単元においては今まで地域の景観に興味をもつことがなかった児童が，地域を調べる学習を通して，土地利用や景観に興味を持っただけではなく，モノや人を関連づけて地域の構造を捉えていくことができていった。さらには，自分たちの居住する地域と比較することでき，地域の共通性と特殊性について考えていくきっかけを作ることができたといえよう。

また，本単元や授業では，肢体不自由児における学習特性を踏まえた上で，それに応じた学習手段を講じて展開していった。これは通常学級においても，重要なことであろうと考える。すなわち，学習活動における個々の学習スタイルを有効に活用していくためのツールや，それに応じた学習手段を考案していくことで，より児童の学習を深めていけるのではないかと考えるからである[(4)]。

従来，社会科の授業場面においても，学習の中で障害のある人との交流や，理解の目的のための授業実践は行われてきた。しかし，今後は障害を抱える児童生徒に対しての教授方略に関する議論が活発に展開されていくことを期待したい[(5)]。

〈註〉

(1) 視覚障害，聴覚障害，知的障害，肢体不自由，病弱・身体虚弱等があげられる。

(2) 学習障害にはいろいろなものがある。例えば，聴覚優位や視覚優位といわれる子どもに対しての学習支援として，前者が聴覚入力の使用に配慮した指導を行うことで学習が効果的であり，後者は指示をする際に内容を紙に書いて提示するなどの視覚的な工夫をすることが有効である。

(3) 事前に家から学校までの手書き地図を描かせたが，家から学校までの道路を描くことはある程度描けることができたが，それ以外の道や道路脇の土地利用の様子について描けない児童が多かった。一方では，車での移動が多いこともあり，信号機の数を覚えていて描く児童もいた。

(4) 今後の学習支援ツールとしては，音教材を用いた授業の提案などが考えられる（山口幸男（2002）『音と地理―音と地域学習―』，日本地理教育学会編 新学習指導要領と地理教育Ⅱ，日本地理教育学会，P48-51）。

(5) 学習障害をもつさまざまな児童生徒に対して，「個の教育的ニーズ」に応じた指導と評価の在り方の検討もされてきている（筑波大学附属桐が丘養護学校（2005）研究紀要第40巻）。

表1　単元の指導計画（全21時間）

展開	学習・活動内容	時数
第1次	学校の周りを調べる計画を立てる。	3時間
第2次	学校の周りを探検する。	5時間
第3次	学校の周りの大きな絵地図を作る。	6時間
第4次	学校の周りの様子について考える。 ・朝と夕方の人の流れから考える。 ・土地利用の様子から考える。 ・自分たちの住むまちと比較する。	7時間